

最初のしるし: カナの婚礼 ヨハネ 2:1-12

- それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、そこにイエスの母がいた。イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。(2:1-2)
 - ヨハネの福音書は、イエスの公のミニストリーについて興味深い書き方をしている。第1章(もとの写本では章に分けられていない)ではすでに4日間の記事があるが、ここではイエスの公のミニストリーの記事を3日目から始めている。
 - ユダヤ人にとって3日目というのは特別な意味がある。創世記の天地創造の記事では3日目に2倍の祝福があつた。したがってユダヤ人は結婚式のような特別なイベントは週の3日目(火曜日)に行うことが多い。クリスチャンにとっては、イエスが3日目によみがえられたということから特別な意味がある。
 - また3日目というのはその前の4日間(第1章)を足すと7日目ということになる。7日目というのは安息日ということの意味を持つ。最初のしるしが神の安息に入る約束を予表する7日目にあつた、ということになる。
- ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」(2:3-4)
 - 聖書時代のユダヤ式結婚式は1週間続くのが普通であつた。結婚式の世話役は客をもてなす義務があり、それをしなかつたりできなかった場合は法的な措置をとることもあつた。(例えば客が世話役の羊を持って帰って良い、など)
 - マリヤはおそらくただのゲストではなく新婚夫婦をもてなす立場にあり、なんとかして役目を果たしたいと思つた。そこで自分の息子イエスに助けを求めたが、イエスの答えは「わたしの時はまだ来ていません。」というものであつた。
 - ここではぶどう酒を切らしてしまつたという以外はマリヤは正しいことを行なつてゐる。彼女はイエスに助けを求めるが、期待したような答えは返つてこなかつた。時として私たちも正しいことを行なつても神様からは期待通りの答えが返つてこない時がある。
- 母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあつた。イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところまで持って行きなさい。」彼らは持つて行つた。(2:5-8)
 - マリヤは手伝いの者たちに「あの方の言う通りにしなさい」と指示する。私たちが神に求める時大切なことは、神様のおっしゃるとおりにすることである。
 - 神様の奇跡というのは多くの場合私たちの従順と神様の摂理の組み合わせである。神様に従う時、神様は私たちにできないことを成し遂げてくださる。
 - イエスはごく普通の儀式のきよめの水、手足や食器を洗う水を今まで味わつたことのない最上級のぶどう酒にかえてくださった。しかし普通の水だとわかつていて水がめを満たし世話役のところまで持つて行つたしもべたちの従順さもこの奇跡が実現するために必要であつた。
- イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。(2:11)
 - これはイエスがメシヤであることを示す最初のしるしであつた。ヨハネはこれらの奇跡のことをしるしと言つてゐるが、それはさらに重要なことを示唆しているからである。水がぶどう酒に変わった奇跡はただパーティーの場の必要を満たしたということではなく、私たちの人生の中で神様がどのように働かれるかという予表になつてゐる。この福音書を通してしるしが何を指しているかということを考えることが大切である。
 - また、この福音書の中では「栄光」という言葉もキーワードになつてゐる。この福音書を通してその言葉の意味、そしてどうしたら正しく栄光を与え受けることができるか、特にどのようにしたら神様が受けるべきすべての栄光を私たちがささげていくことができるか、ということを考えることが大切である。